特集 新しい評価のあり方

小学校外国語活動から入門期へ
― その評価のありかた

荒尾浩子
（三重大学）

1. はじめに

平成 23 年度から新学習指導要領が施行され，小学校で外国語活動が 5，6 年生における必修として始まりました。移行期間を含め児童の評価のあり方については検討が重ねられてきました。また平成 24 年度からは中学校外国語科（英語）における新学習指導要領が施行されます。外国語活動との接続を念頭に，本稿では入門期の評価のあり方やその後の生徒の英語学習への態度や意欲について論じます。

2. 小学校外国語活動の評価

(1) 小学校外国語活動の目標と評価など

平成 23 年 11 月に国立教育政策研究所が「評価方法等の工夫改善のための参考資料」（小学校編）で基本的な評価のあり方等を示しています。外国語活動の評価については，「設置者において，学習指導要領の目標及び具体的な活動等に沿って評価の観点を設定することとし，文章の記述による評価を行う」としています。

紙幅の都合上，外国語活動の目標は改めて記しませんが，それを念頭に置くと，評価においては技能の習得や到達の度合ではなく，活動過程を重視することが重要だとわかります。さらに，明記されているように，評価は数値による評定ではなく記述によるものです。学びの指針となるよう，児童が読んでも明解でなくてはなりません。どこが高く評価され，認められたのかが読んで難なく汲み取れ，はげみとなるような記述が望ましいでしょう。以前，小学校の先生のとまどいの声として，「外国語活動は何かが『できる』ことが目標ではないから，“～することができた”という評価の記述はいけないのでしょうか…」というのを聞いたことがあります。しかし『～できた』を使用せず，例えば，“友達の話している英語をしっかりと聞き，意味を理解し応じようとしていた”とか，“ALT の先生の話す英語の表現の意味を知ろうとし，活動内で積極的に使おうとしていた”といった評価では，児童にはピンとこないはずです。高く評価すべき部分は躊躇なく『～できた』と記述した方がよいというのが筆者の考えです。外国語活動ではよい所に思い切り光を当て評価し，それを伸ばすことを重視すべきです。

(2) 観点別評価と評価方法

評価の観点は，平成 22 年 5 月の初等中等教育局長通知の「小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」に例示されており，「1. コミュニケーションへの関心，意欲，態度」，「2. 外国語への慣れ親しみ」，「3. 言語や文化に関する気付き」の 3 点です。これらを参考にし，さらに各学校の実態に応じた活動内容を反映した独自の観点を追加することもできます。

『英語ノート 指導資料』（文部科学省）では，外国語活動の目標の 3 つの柱に基づいた評価基準例を評価方法とレッスン番号とともに示しています。評価方法の例としては，行動観察，発表観察，英語ノート点検を挙げています。自己評価もここに加えてよいでしょう。児童に書かせる振り返りカードなどは，活動でどのような気付きがあり関心を高めたか，どんな意欲をもって取り組めたかなど，観察のみでは得られない情報源となります。

実際の評価方法は複数考えられます。「1.『英語ノート 指導資料』に示された各レッスンに観点ごとに示されている具体的な評価基準例を活用し，レッ

スンごとに評価する」,「2.1 回ごとの活動において活動内容を反映し児童に求める具体的な姿を評価基準として定め評価する」,「3.1 回の外国語活動を構成する複数の活動（例えば，導入の歌，コミュニケーション活動など）の 1 つ 1 つに観点を決めて評価基準を設定して評価する」。

1，2，3 と評価基準が多くなるにつれ最終的な評価は妥当性を高めるかもしれません。しかし現実問題として，3 の評価の方法で細かな記録をとる作業は大変な労力です。活動直後に簡単に記録をすることや，日頃から ALT に協力を求め児童一人ひとりの活動での様子について話し合い確認し合うことでも，妥当性の高い評価をすることができるでしょう。

3. 中学校入門期における評価のありかた

(1) 中学校の観点別評価について

平成 24 年度からの評価も現行の観点別によるものです。「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「表現の能力」「理解の能力」「言語や文化についての知識・理解」の 4 つの観点を A から C の 3 段階で分析し，総合的に 5 段階で評価します。

観点項目はそのままですが，平成 24 年度施行の新学習指導要領に示された改善基本方針，また英語科の目標を評価のありかたに反映する必要があります。1 つの要は，4 技能を総合的に育成する指導の重視です。コミュニケーション能力の基礎は聞くこと，話すことに加え，読むこと，書くことと明示され，1 つ 1 つの技能を単独に行うだけでなく，4 技能を連動させ実際に使用できることが評価されます。

(2) LESSON に入るまでの評価など

教育評価の目的は，主に生徒のため，そして教師のための 2 つです。LESSON に入る前は，主として，教師のための評価です。教師が LESSON 以降の学習指導をどのようにしていくのか判断するのが目的です。*24NC* では，Get Ready（1 ～ 4）として LESSON 前の準備段階を設けています。小学校との連結部分であり外国語活動で育んだコミュニケーションの素地を確認するところです。外国語活動の体験が多様である上に，個人レベルでも定着や習熟の度合いが異なっています。Get Ready での活動を通して生徒の行動を観察し，どの位の割合の生徒がどの程度の英語を聞いて理解できているのか，複数形の定着度はどうか，正しい発音を身につけているか，どんな語彙や表現を学んできているか，また音と文字の結びつきをどの程度理解しているのか判断します。あくまでも指導方針の指針を得るための評価なので，個人の厳密な記録に時間を割く必要はありません。

(3) 入門期の 4 技能の評価など（初期）

24NC では，入門期は Get Ready を含めて LESSON 6 までを指し，LESSON 1 から読む，書く，聞く，話すといった 4 技能を意識し構成されています。LESSON 1 以降で，生徒は初めて技能評価を与えられます。外国語活動では聞く，話す活動で「流調性」に表れる慣れ親しみや背後にある積極的な態度によって認められてきた生徒達に，中学校の英語の評価で求められる「正確さ」や言語の規則の「理解」などの重要性を認識させなくてはいけません。特に正確に書くことの基礎をこの入門期で徹底させる必要があります。

(4) 小学校から中学校へ―その後の意欲面等の継続

コミュニケーション能力の素地を育んできた生徒がこれまで許容されてきた曖昧さが中学校の英語では通用せず英語学習の煩雑さや困難を覚えることも考えられます。入門期の段階でのつまずきやそれに伴う「失敗感」は，その後の英語学習への大きな痛手となります。教師は，生徒の出した成果に対して機会がある度に，よかった点，改善点，改善方法を共に確認しながら，決して「無力感」を味わわせてはいけません。教師の意識的な賞賛や激励によって，外国語活動と同様に，授業内で積極的にコミュニケーションをする姿が認められているという意識を生徒に引き続きもたせることが重要です。

4. おわりに

外国語活動と中学校の英語では評価の観点，その方法は変わってきますが，学ぶ側の生徒にとっては，「英語」の学びであることには変わりありません。違いばかりを強調せずに，これまでやってきたもの，身につけたものを積み上げて，さらに発展できるのだという明るい展望をもたせながら評価していくことが重要となるでしょう。